The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	退職にあたって
Author(s)	渡邉, 克昭
Citation	大阪大学英米研究. 2024, 48, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99596
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

退職にあたって

渡邉　克昭

ふと気がついてみると、1985 年に大阪大学に着任して以来、39 年が過ぎようとしている。大阪外国語大学英語学科を卒業後、大阪大学文学研究科英文学専攻の博士後期課程を経て、大阪大学言語文化部に助手として着任した私は、2 年半後に大阪外国語大学に移り、さらに大学統合によって再び大阪大学への所属替えとなった。まさに二つの大学を振り子のように往来し、ハイブリッドそのものといってよい人生であったが、「一粒で二度おいしい」というグリコのキャッチコピーさながら、二つの大学の素晴らしさを堪能することができ、実に恵まれた教員生活だった。

阪大言文、外大、統合後の阪大外国語学部と、私が籍を置いた三つの部署は、いずれも居心地がよかった。それは私が、何よりも、面白いことを探すのが好きで、他のことはすぐに忘却してしまうという性分に多分に起因していると思われるが、いずれの持ち場でも、研究と教育に打ち込むことができたのは、人間的魅力を備えた同僚の先生方、すこぶる優秀な学生や院生の皆さん、有能な事務の方々に恵まれたことに尽きる。今となっては、ただただ感謝あるのみである。大学教員は、同僚、学生、給料の 3 つのうち、1 つでも満足できれば儲けものという話もあるが、母校の恵まれた環境において、常に学問的刺激を受けながら、好奇心の赴くまま、定年まで楽しく学究生活を送ることができたのは、ラッキーというよりほかない。

それが可能だったのは、ひとえに外国語学部が、風通しがよく、上下の隔てなく互いを尊重しながら自由闊達に議論ができる気風に満ちていたからである。単科大学だった外大時代には、独立法人化にともない、大学の行く末をめぐって、連日、白熱した議論が交わされたこともあったが、思い起こせ

ば、それもまた懐かしいセピア色の思い出である。とはいえ、そのような先人たちの真摯な思いが見事に結実し、現在の大阪大学外国語学部が存続していることだけは忘れてはなるまい。

英語専攻の雰囲気もまた私のお気に入りであった。学問的に素晴らしい業績をあげておられるのみならず、ユーモアと人情味溢れる同僚の先生方と信頼関係で結ばれ、困難に直面しても知恵を出し合って様々なミッションに取り組むことができたことは、まことに有り難かった。あの場面、この場面、あの先生、この先生と、私の人生のアルバムを彩る思い出は尽きないが、この大学で触れ合うことのできたすべての方々に、この場を借りて感謝申し上げたい。

このように英語専攻の教員同士の和気藹々とした親密な関係は、学生の皆さんにも自ずと伝わるものである。そうした素晴らしい学習環境の中で、日々、授業で切磋琢磨し、目を輝かせて学問に取り組んでくれた学生の皆さんに、どれだけこちらが鍛えられたことだろうか。その有り難さは、なかなか一言では言い尽くせない。私が研究と教育を有機的に繋ぎ合わせ、臆面もなく新しいテーマにチャレンジし続けることができたのは、教室という貴重な学問研鑽の場が常に実践的に開かれていたからである。

大学院においても、そうした学問の楽しみを院生の皆さんとさらに奥深く味わうことができたのは、教師冥利に尽きる。貴志先生をはじめ諸先生方のご協力も得て、多くの優秀なアメリカ文学・文化研究者が伸び伸びと才能を開花させ、巣立っていくのを見守ることができたのは、望外の喜びである。進取の気性に富んだ学風を引き継いで、各地の大学で後進の指導にあたる教え子たちや、社会の第一線で活躍する卒業生を見るにつけ、私が恥ずかしげもなく撒き散らしたささやかな種が、「一粒万倍」のごとく、またどこかで豊かに実り、幸せな未来が開けていくことを願うばかりである。